

いちごんさん



葛城明神

葛城一言主神社社務所

奈良県御所市大字森脇 4 3 2

☎ 639-2318 ☎ 0745-66-0178



一言主神社の杜（神降）

御祭神

葛城之一言主大神
幼武尊

御由緒

本社に鎮まります一言主大神は、第二十一代雄略天皇（幼武尊）が葛城山に狩をされた時に、顕現されました。その時の次第が『古事記』『日本書紀』伝えられています。『古事記』の伝承は次のようなものです。

また一時、天皇葛城山に登り幸でます時に、百官の人ども、悉に紅き紐著けたる青摺の衣を給はりて服たり。その時にその向ひの山の尾より（尾根づたいに）、山の上に登る人あり。既に天皇の鹵簿に等しく、またその束装の状、また人衆も、相似て傾かず。ここに天皇望けたまひて、問はしめたまはく、「この倭の国に、吾を除きてまた王は無きを。今誰人かかくて行く」と問はしめたまひしかば、すなはち答へまをせる状も、天皇の命の如くなりき。ここに天皇いたく忿りて、矢刺したまひ、百官の人どもも、悉に矢刺しければ、ここにその人どももみな矢



亀石



一陽来復祭

刺せり。かれ天皇また問ひたまはく、「その名を告らさね。ここに各名を告りて、矢弾たむ」とのりたまふ。ここに答へてのりたまはく、「吾まづ問はえたれば、吾まづ名告りせむ。吾は悪事も一言、善事も一言、言離の神、葛城の一言主の大神なり」とのりたまひき。天皇ここに惶畏みて白したまはく、「恐し、我が大神、現しおみまさむとは、覚らざりき」と白して、大御刀また弓矢を始め、百官の人どもの服せる衣服を脱かしめて、拝み献りき。ここにその一言主の大神、手打ちてその奉物を受けたまひき。かれ天皇の還り幸でます時、その大神、山の末に満みて、長谷の山口に送りまつりき。かれこの一言主の大神は、その時に顕れたまへるなり。

このように、一言主大神は天皇と同じ姿で葛城山に顕現され、雄略天皇はそれが大神であることを知り、大御刀・弓矢・百官どもの衣服を奉獻したと伝えられています。このように天皇はこの一言主大神を深く崇敬され、大いに御神徳を得られたのであります。

この大神が顕現された「神降」と伝える地に、一言主大神と幼武尊（雄略天皇）をお祀りするのが当神社であります。そして、この『古事記』が伝えるところによると、一言主大神は自ら「吾は悪事も一言、善事も一言、言離の神、葛城の一言主の大神なり」と、その神としての神力をお示しになられております。そのためか、この神様を「一言さん」という親愛の情を込めた呼び方でお呼び申し、一言の願いであれば何ごとでもお聴き下さる神様として、里びとはもちろんのこと、古く全国各地からの信仰を集めております。

平安時代の正史に、当社は次のように伝えられております。

・『文徳実録』 嘉祥三年（八五〇）十月辛亥、授葛木一言主神正三位。

・『三代実録』 貞観元年（八五九）正月二十七日甲申、奉授正三位勲二等葛木一言主神従二位。

貞観元年九月八日庚申、大和国一言主神、遣使奉幣、為風雨祈焉。

また、延喜七年（九〇七）に成立した『延喜式』では「名神大社」に列せられ、月次・相嘗・新嘗の各祭りには官幣に預かつていたことが記されております。天台宗を開いた最澄（伝教大師）も、延暦二十三年（八〇四）に入唐する際には、当社に祈願した



蜘蛛塚



乳 銀 杏

と伝えられており、後光厳天皇からは正一位の神格を授かっています。
改めて申すまでもなく、当社は全国各地の一言主神を奉斎する神社の総本社であり、全国各地には当社に参拝するための講があり、現代にも篤い信仰を集めています。

境内社

- ・神功皇后社（神功皇后）
- ・天満神社（菅原道真）
- ・八幡神社（菅田別命・息長帯姫命）
- ・市杵島神社（市杵島姫命）
- ・稲荷神社（保食神）
- ・祓戸神社（瀬織津姫命）
- ・住吉神社（上筒男命・中筒男命・底筒男命・息長帯姫命）
- ・奥宮

参拝のしおり

乳銀杏

樹齢推定一二〇〇年の銀杏の老大木です。この木は「乳銀杏」とも「宿り木」とも呼ばれており、この木に祈願すると子供が授かり、お乳が良く出ると伝えられています。古くから子供を思う親の願いが込められた木として信仰を集めています。

この木は晴れた日にははるか遠くから望むことができ、一言主神社の場所を示す指標としても参詣者に親しまれています。

萬葉歌碑

葛城地方は古代葛城氏の本貫地でした。この葛城氏は四世紀から五世紀にわたって最も栄え、その勢力は大王家（天皇家）と並ぶほどでした。

その葛城氏の祖と仰がれ、四世紀末前後の英雄であったのが葛城襲津彦です。万葉集にその襲津彦の名を詠み込んだ次のような歌が伝えられています。

葛城の襲津彦真弓 荒木にも 頼めや君がわが名告りけむ

（卷十一の二六三九）

当神社では、万葉学者櫻井満博士の筆による歌碑を建立し、ありし日の葛城一族をしのんでおります。

芭蕉句碑

松尾芭蕉は、葛城山に訪れ句を残しており、その句碑が本社境内にあります。その際のことを、芭蕉は次のように記しております。

「葛城山の吟」（『泊船集』所収。句は『笈の小文』にも収められている）

やまとの国を行脚して、葛城山のふもとを過るに、よもの花はさかりにて、峯々はかすみわたりたる明ほののけしき、いとど艶なるに、彼の神のみかたちあしと、人の口さがなくよにいひつたへ侍れば、

猶見たし花に明行神の顔



万葉歌碑



至福の像



蜘蛛塚

神武即位前紀は、次のような伝承を伝えています。
 高尾張邑に、土蜘蛛有り。其の為人、身短くして手足長し。
 侏儒と相類たり。皇軍、葛の網を結きて、掩襲ひ殺しつ。因
 りて改めて其の邑を號けて葛城と曰ふ。

本社境内には、この土蜘蛛を頭と胴と足の三つに分けて埋められたという塚が三つ伝えられております。

至福の像

本社には参詣者の長寿をお祈りし、ボケ除けを祈願するための至福の像をお祀りしております。

亀石（水神）

災いをもたらす黒蛇を役行者が調伏し、その上に亀の形をした石を置いたという亀石が伝われます。さち石・清め石とも呼ばれ、この石から流れ落ちる水で身を清める参詣者は後を絶ちません。

葛城古道

奈良盆地の西側、葛城・金剛山の東麓には早くに有力豪族が栄えました。最近、明日香が「日本古代国家の故郷」として多くの観光客を集めておりますが、この地域はさらに早く葛城王朝が形成されました。この地域を縦貫する全長13kmほどのメインストリートと、それに交わる何本かの里道を合わせて「葛城古道」と呼んでいます。

一言主神社の主な年中祭記

●歳旦祭（一月一日）

新年を迎えることのできた喜びを神様に感謝申し上げるとともに、一年の安全・豊穡を祈念する祭りです。境内は十五日位まで、全国からの初詣客で賑わいます。

●節分祭（筒竹祭とも。二月三日頃）

暮れから正月にかけて神社に返納された古札を、当神社では節分にお焚き上げします。古米、節分もまた「年越し」であると伝えられ、当神社でもそうした日としての行事が伝えられているわけですが、そして、その火で太い竹にいたれた酒を暖め、参詣者に振る舞い、これを飲めばその年は流行病にかからないと伝えられています。また、この地方では節分にはその年の恵方に向かつて、巻寿司を丸かじりすると良い年になると伝えられており、当社でも参詣者のために巻寿司を用意しております。

●春の大祭（四月五日）

一言主神社の春の大祭です。氏子地区の総代が奉仕して祭りをを行います。また、毎年この日に必ず参拝しなければならぬと古くから伝えられている氏子地区以外の講があります。

●稲荷社祭（五月三日）

境内末社の稲荷社の祭りです。

●秋の大祭（御神火祭とも。九月十五日）

一言主神社の秋の大祭です。拝殿奥の本殿の前に神火壇を作り、参詣者の願い事を記した祈禱串を焚きます。この祭りは火を祀るがゆえにとりわけ厳重な潔斎が必要で、祭りに奉仕する神官は、数日前より精進潔斎につとめ、前夜からはお籠りをします。

祭り当日は宮司が祭典を行った後、神火壇に火をつけ、奉納された祈禱串を次々と火にくべて



座講祭



ヨミヤ提灯

●座講祭（十月十四、五日）

いきまます。天候に恵まれれば、参詣者に拝殿奥に上がって頂き、自らの手で祈禱串を火にくべて祈願をして頂くことになっております。もともと、一言主神社は葛城山で修行する修験者たちの信仰を集めており、葛城山に入峯する修験者は必ず参詣したといひます。また、社伝によると、室町時代にあたる文明十四年（一四八二）に藤原遠厚が、各地から神主・先達・山伏を当地に集め「火焚祈禱祭」を行った時にこの御神火祭も初まるという、同様にこれに因む由緒を持つお守りとして、「一陽来復お守り」が当社には伝えられています。

一言主神社は、郷の総鎮守として十カ大字の氏子地区の崇敬を集めていますが、近世初期以前の氏子地区にはいろいろと変遷がありました。氏子地区の中にはそうした名残をとどめるものとして座が残されており、座講祭という祭りを伝えています。

各座では頭屋を決めて、三メートル程もある大きな竹の御幣を作るなどの準備をします。宮戸では頭屋が座に伝承されるムラサキを栽培して幣紙を染めるといふことから民俗学的に注目を集めています。そして、森脇は十四日に、宮戸は十五日に一言主神社に渡御します。その際、頭屋では、それぞれの座のしきたりに合わせた行事が執り行なわれます。行列の中心は御幣で、獅子神楽や天狗の面などが行列を作ります。また、十四日の夜には、各大字からススキ提灯や子供提灯の渡御があり、地区によっては垣内ごとに出るところもあって、これが一堂に会する様は当神社の秋の風物詩として参拝者の目を楽しませています。

●一陽来復祭（冬至の日）

冬至は「一陽来復」の護符を各家庭でお祀りする日とされていますが、当神社でもこの日の祭りを、夜中に行う秘儀として室町時代より伝えておりました。しかし、近年になって参詣者の熱意によって夕刻に行うようになり、誰もが参詣できる祭りになりました。この祭りは御神前にお灯明を献灯し、万物の霊を慰め、陽を迎えて再生を願い、招福を祈願する祭りです。このように献灯を行うことから、この祭りを献灯祭とも呼んでいます。また、いつからかは不明ですが、当日境内では大根焚きを行い、これを参詣者に振る舞う習わしになっております。



御鎮火祭



節分祭